

38

明治期における「杉山真伝流百法鍼術」の 成立と変遷について

大浦 宏勝, 市川 友理

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究室

【緒言】 明治40年代から昭和10年代にかけて、杉山真伝流を出所とするとみられる「百法鍼術」の名を冠した刺鍼手技術が、鍼灸界において盛んに研究された。これらは、江戸元禄期頃に編纂された正統の流儀書『杉山真伝流』中にみる「九十六法」と呼ばれる手技術と比較すると、手技の名称は一致するものの、その内容は著しく異なる。それは14種の押手式と「浮水六法」という弾入の手法、「初専」「次専」「左二回右一回」などの細かな刺鍼中の手技を逐一指示することに特徴がある。「百法鍼術」は戦後顧みられなくなったが、日本鍼灸の歴史上一定の影響を与えたことは間違いない。それゆえその成立と変遷過程を歴史的に検証し、位置づけを明確化することにした。

【方法および調査結果】 昨年、京都府立盲学校資料室所蔵の杉山流および杉山真伝流の名を冠した資料群を調査した結果、「杉山流鍼法手術及主治口伝」と題した資料を発見した。これが後に「百法鍼術」と総称される手技群の初出である。吉見英受の弟子である高橋啓次郎の筆写したもので、他の資料群の筆写年代から明治20年代のものと推定される。手術内容と主治からなり、別に吉見輝雄が筆写した口伝のみの補足資料がある。同系統の資料に明治42年に奥村三策が編した「古今鍼治類集」がある。これは吉見由来のものと同類の資料を奥村が手に入れ、奥村風に簡潔に手技内容のみをまとめたものだが、元となった資料は焼失し奥村の点字本だけが残っている。また明治43年に福岡県の猪之口哲照が筆字本「旭流秘伝書」にて「旭流百法ノ鍼術」として術式・解釈・口伝・主治をまとめた。これが「百法鍼術」呼称の始まりであり、体系化の完成と考えられる。さらに大正12年には福岡桂司が油印本「鍼灸技術学」を著し、その中心的な内容として猪之口の「百法鍼術」を流用し若干の補足を加えた。これは広く当時の鍼灸界に流布し読まれたようである。そして昭和4年には牛島鉄弥が油印本「杉山真伝流百法鍼術」として、術式のみをまとめ流布させた。これら油印本は大正～昭和初期に創立された各地の鍼灸学校教科書にも一定の影響を与えたといえる。長崎の松尾鍼灸学校編「最新鍼灸治療学」はその一例である。これらの7種の資料および書籍を、手技内容の文章表現、主治の病症表現、手技群全体の構成形式などの違いに着目し比較検討した結果、核となる手技内容は同様であるものの、各年代の編者の独自性により主治の表現や口伝内容や構成が変えられていったことが分かった。また、「百法鍼術」として完成された各手技ごとの内容を分析すると、(1) 核となる明治初期に伝わった杉山流諸家の「術式」、(2) 流儀書『杉山真伝流表之巻第五』十八術から引用した「解釈」、(3) 同十八術の口伝引用と十八術以外の手技に関する後世諸家の解説を付記した「口伝」、(4) 手技を応用すべき病症を明治大正期の西洋医学的病名で表現した「主治」とから構成されることが判明した。

【まとめ】 「杉山真伝流百法鍼術」は、幕末から明治初期にかけて杉山流の鍼術諸家が、和田家より流出した真伝流の手技術名と内容の伝聞をもとに独自に作り出した手技内容であり、正統の杉山真伝流のものとは同名異形である。またそれは、正統の流儀書が公開されていなかった時代ゆえの産物ともいえる。複雑な術式に当時の諸家の工夫を窺うことは一定の意義があると思われるものの、杉山真伝流の手技研究の面からは混乱要因であり除外すべきである。「百法鍼術」は現段階では吉見英受の伝聞を初出とする。その手技内容を核としつつ、時代が下るにしたがって編集諸家が入手した『真伝流』原文の引用や西洋医学的な独自の解釈と主治病名が補足付記され完成していったもので、その評価は慎重になされるべきである。